

明治期の小学校英語教授法研究(1)

—— 杵田與惣之助『英語教授法綱要』の翻刻と考察 ——

Matsuda Yosonosuke's *The Outline of English Language Teaching* (1909) :
A Rarity Used as Teaching Material at a Normal School (Part 1)

江利川 春 雄
Haruo ERIKAWA
(和歌山大学教育学部)

2009年10月5日受理

Abstract

This paper discusses the exceedingly rare teaching material, *Eigo Kyojuho Koyo* (*The Outline of English Language Teaching*), handwritten and mimeographed in 1909 by MATSUDA Yosonosuke (1882~1960). This handout, composed of eighty-four printed sheets, was distributed as a teaching guide to normal school students who learned English teaching methodology for elementary school pupils.

In this paper, the first one-fifth of his handwritten printed text is deciphered and quoted with annotations. Matsuda's teaching material is quite unique and valuable as the first historical, systematic and comprehensive study of English teaching for elementary schools.

1. はじめに

2008年に告示された小学校の学習指導要領によって、5・6年生への「外国語活動」(実質的には英語)の必修化が決まった。この方針をめぐっては賛否両論あるが、大きな議論の一つとして、小学校で英語を教える教員の養成と研修をどうするかという問題がある。2009年時点で、英語(中・高)の教員免許を持つ小学校教員は4%程度であるから、この問題に関しては十分な研究と実践が必要であろう。

英語教員の養成に携わる筆者は、こうした問題意識から、小学校教員を養成した師範学校(教員養成系学部の前身)における英語科教授法の授業実態を考察することにした。

公立小学校における英語教育は1990年代に始まったものと誤解されがちであるが、実際には明治期から実践されてきた(江利川2006、第5章)。戦前の小学校では尋常科に接続する高等科(高等小学校)において、英語を加設科目として開設する学校が都市部を中心に存在した。地域格差が著しいが、開設率の全国平均はピーク時の1930年代で10%程度だった。

そのため、師範学校では小学校で英語を教えることのできる教員を養成する必要がある、英語の授業の一環として「小学校に於ける英語教授の方法を会得せしむる」ことが定められていた。ただし、小論で考察する明治末期の場合、師範学校の英語は男子が必設随意科、女子が加設随意科という位置づけの選択科目で、時数も週3時間程度と軽んじられていたから、英語教

授法に割ける時間は一般には5時間程度と僅少だったようである(江利川2006、第4章)。

師範学校における小学校英語教授法の教育実態については、関係資料が極端に乏しいことなどから、これまでほとんど研究されてこなかった。小論で扱う杵田與惣之助(1882~1960)の『英語教授法綱要』(1909:明治42年)は、彼が愛媛県師範学校の生徒に配布した手書きの謄写刷プリント84葉(168ページ)を自家製本したもので、京都の杵田家に1セットだけ残された類例のない資料である(図2)。

そのため小論では、解説や考察は最小限にとどめ、原資料を忠実に翻刻し紹介することに主力を注ぎたい。

2. 杵田與惣之助の略伝

杵田の履歴と業績については、江利川(2008、第4章第2節)で詳細に述べたので、ここでは概略にとどめる。

杵田與惣之助は明治末期から昭和戦前期に、英語教育者、英語教授法研究者、道德教育者、旧制中学校及び師範学校の

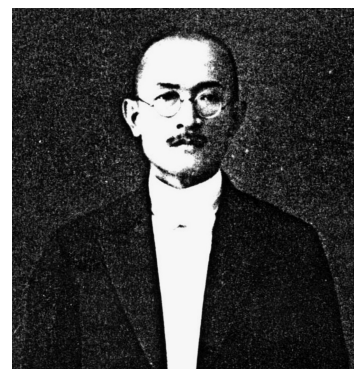


図1 杵田與惣之助(1882~1960)

校長として教育現場の第一線で活躍した。彼は1882(明治15)年12月に滋賀県で生まれ、滋賀県師範学校を卒業後、小学校訓導(教諭)を経て、広島高等師範学校に入学した。1908(明治41)年3月に本科英語部を卒業後、愛媛県師範学校に赴任した。

この愛媛師範時代に授業資料として『英語教授法綱要』を執筆・配布したことは、その序言の日付「明治四十二年一月十四日」と、「本論は教室筆記の労と時とを省略するの目的に出たるもの」という記述から明らかである。ただし、本文の末尾には(四〇、二、一九)と記されているので、これが「明治40年2月19日」だとすれば、広島高等師範学校本科英語部2年在学中となり、内容の一部は学生時代のノートに基づいている可能性がある。

なお、杣田は『英語教授法綱要』の内容を大幅に増補改訂して、1928(昭和3)年に『英語教授法集成』(菊判494ページ)を謄写刷で自費出版している。

3.『英語教授法綱要』(1909)の翻刻と注解

『英語教授法綱要』はB4版の更紙に謄写版で印刷されており、中央に数字で通し番号(葉番号)が付されているが、杣田家所蔵のものは中央から二つ折りにされており、袋とじに簡易製本されている。また、表紙に「英語教授法綱要」、背に「英語教授法綱要 杣田著」、扉に「杣田與惣之助著／英語教授法綱要」と墨書きされている。大きさは縦238mm、横162mm、厚さ19mmである。

小論での資料翻刻は、紙幅の制約から、第四章第二節まで(全168ページ中の31ページ分)とした。

【凡例】

- 一、原本の旧漢字は原則として新漢字に改めたが、仮名遣いは原文のままとした。
- 一、難解な漢字には適宜ルビを施した。
- 一、句読点、改行は原文のままとしたが、段落冒頭は一字下げで統一した。
- 一、判読が困難な字句は□□で示し、前後から類推で

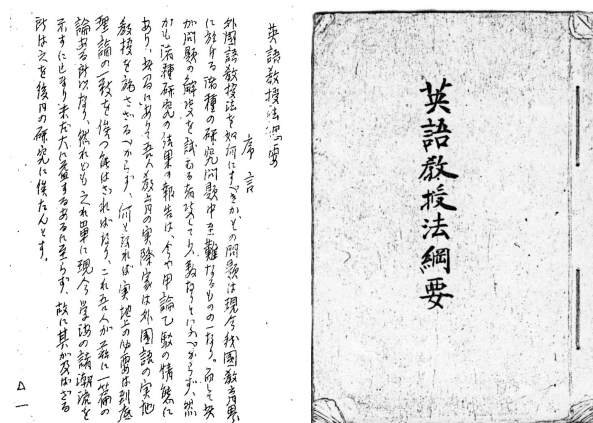


図2 『英語教授法綱要』の表紙と序言

きるものは〔* * ?〕で示した。簡単な注は〔 〕で文中に示した。

- 一、見やすくするために、章と節のタイトルは強調文字に改め、前の章および節との間に余白を設けた。
- 一、原本は縦書きだが、翻刻では横書きとした

英語教授法綱要

序言

外国語教授法を如何にすべきか、との問題は現今我国教育界に於ける諸種の研究問題中至難なるものの一なり。而して此が問題の解決を試むる者決して少数なりといふべからず、然かも諸種研究の結果の報告は、今や甲論乙駁の情態にあり、此間にありて吾人教育の實際家は外国語の实地教授を施さざるべからず、何となれば実地上の必要は到底理論の一致を俟つ能はざればなり、これ吾人が茲に一篇の論ある所以なり、然れども之れ単に現今学海の諸潮流を示すに止まり未だ大に益するあるに至らず、故に其が及ばざる所は之を後日の研究に俟たんとす。

尚本論は教室筆記の労と時とを省略するの目的に出たるものにして力めて概括的ならんことを期したり故に往々にして一読理解し難き点なきにあらず 然れどもこは肉無き骨の常とする所たらずんばあらず

明治四十二年一月十四日

英語教授法綱要

目次

序言

第一章 本邦に於ける英語の略史

第一節 本邦洋学の略史

第二節 本邦に於ける英語の略史

第二章 本邦小学校英語科の略史

第三章 欧米の小学校に於ける外国語科

英国—独国—米国—白国—蘭国—丁国

第四章 本邦小学校英語科の目的

第一節 近世外国語教授の一般的目的

第二節 本邦に於ける外国語教授の必要

第三節 本邦小学校英語科の目的

第一 法令上及理論上より見たる本邦小学校英語科の位地

第二 本邦小学校に英語と限定せる理由

第三 本邦小学校英語科の目的

第四 本邦小学校英語科の設置

第五 本邦小学校英語科の教授時数

第六 本邦小学校英語科教授児童の編成

第五章 英語教授の方法

第一節 欧米に於ける近世外国語教授の諸方法

第一 読書法

第二 文法法

第三 ¹⁾	テキスト中心法
第四	暗誦法
第五	グアン法
第六	ベルリッツ法
第七	エナ学校法
第八	発音法
第九	革新派
第二節	本邦に於ける外国語教授の略史 ²⁾
	読書法時代—文法時代—新式時代
第三節	英語科各分科の教授 ³⁾
第一	語彙（ヴォカブラリ）
第二	発音
第三	綴字（スペリング）
第四	講読
第五	作文
第六	文法
第七	聴取及書取
第八	会話
第九	習字
第十	参考
第十一	各分科の排合
第十二	教科書論
第四節	英語教授法
第一	一般原理
第二	教授の段階
第三	教授の様式
第四	教案（省略）
第六章	英語教授と他教科との関係

第一節	緒論
第二節	英語教授と国語科との関係
第三節	英語教授と修身科との関係
第四節	英語教授と歴史科との関係
第五節	英語教授と地理科との関係
第六節	英語教授と理科との関係
第一	理化
第二	博物
第七節	英語教授と手工図画科との関係
第八節	英語教授と美術科及商業科との関係
第九節	英語教授と唱歌科との関係
第十節	附説
第七章	参考書（省略）
	〔教案例〕
	〔第一 英語教授の第一時〕
	〔第二 稍進みたる教授〕
	〔教案〕

英語教授法綱要

(マフ)
松田與惣之助

第一章 本邦に於ける英語の略史

第一節 本邦洋学の略史

本邦洋学の略史を知るは英語の略史を知るに先ち極めて必要の事に属す、然れども之か詳細の記述は之を止め、茲には唯洋学年表を明して大体の観念を得るに満足せんとす、年表左の如し。

本邦洋学略年表

世紀	年号	年	天皇	将軍	
一五〇一	文亀	一	後柏原	義澄	南蛮人（西、葡）鉄筒ヲ伝フ、一ニ曰ク一五一一ナリト
一五四一	天文	一〇	後奈良	義晴	葡国商人鹿兒島ニ入港
一五四九	〃	一八	〃	義輝	アンゲル ⁴⁾ 葡語、 ⁵⁾ 拉典語ニ通ジ基督教ヲ弘ム
一五八六	天正	一四	正親町	秀吉	基督教ヲ禁ズ
一五九六	慶長	一	後陽成	秀次	葡船土佐沖ニ漂着
一六〇〇	〃	五	〃	秀頼	関原役、蘭船堺ニ来リ江戸ニ廻航、淹留
一六〇八	〃	一三	〃	秀忠	蘭 ^{オランダ} 人平戸ニ来ル
一六三八	寛永	一五	明正	家光	島原乱平グ
一六三九	〃	一六	〃	〃	基督教ヲ禁ズ（宗門改）英蘭人追放セラル
一六四一	〃	一八	〃	〃	長崎和蘭商区トナリ、葡人出島ニ居留ヲ許サル
一七〇九	宝永	六	東山	家宣	羅馬伝教師 ⁶⁾ 来ル
一七一二	正徳	二	中御門	〃	白石「菜籃異言」ヲ著ス
一七二〇	享保	五	〃	吉宗	洋書舶載ノ禁ヲ解ク
一七三九	天文	四	櫻町	〃	吉宗青木昆陽ニ命ジ葡語 ⁶⁾ ノ天文地理書ヲ読マシム
一七四四	延享	一	〃	〃	昆陽蘭文ヲ講ズ 洋文ヲ講ずる始
一七七一	明和	八	後桃園	家治	前野良沢蘭書ヲ昆陽ニ学ブ
一七八〇	安永	九	光格	〃	前野良沢、西善三郎、吉雄幸作、桂川甫周、杉田玄白等蘭語ノ「人身内景図説」ヲ訳ス
一七八三	天明	三	〃	〃	大槻玄沢「蘭学階梯」ヲ著ス
一七九二	寛政	四	〃	家斎	露国使節来リ「北槎聞略」成ル、露学ノ始
一七九六	〃	八	〃	〃	海上鴟波〔＝稲村三伯〕「波留麻和解」ヲ著ス 辞書対訳ノ始
一七九九	〃	一一	〃	〃	宇田川玄真「医範提綱」ヲ著ス
一八〇八	文化	五	〃	〃	英船長崎ヲ侵ス、長崎訳官ノオ学アル者ニ英露両国語ヲ兼学セシム
一八一	〃	八	〃	〃	江戸天文台ニ翻訳局ヲ設ク

一八一六	〃	一三	〃	〃	玄沢「蘭学凡」(文法書)ヲ著ス 西洋文法書ノ始
一八二六	文政	九	仁孝	〃	青地林宗「気海観瀾」ヲ著ス 理学ノ始
一八三九	天保	一〇	〃	家慶	宇田川榕庵「舎密開宗」ヲ著ス 化学ノ始
一八四〇	〃	一一	〃	〃	幕府天文方ニ令シ洋書ニツキ反訳セル暦、医、天文書ヲ流布セサランコトヲカメシム
一八四七	弘化	四	孝明	〃	川本幸民「気海観瀾広義」ヲ著ス ⁷⁾
〇此頃					藤井三郎「英文範」ヲ著ス 英学ノ始 ⁸⁾
一八四八	嘉永	一	〃	〃	村上英俊仏学ヲ始ム
一八四九	〃	二	〃	〃	幕府翻訳ニ制限ヲ設ク
一八五三	〃	六	〃	〃	ペリー来ル、人心洋学ニ向フ
一八五四	〃	七	〃	〃	幸民等「遠西〔奇〕器述」(写真、鉄道ノ書)ヲ著ス
一八六〇	万延	一	〃	〃	新見豊前守等米国ニ使ス
					福沢氏「華英通語」ヲ著ス
一八六二	文久	二	〃	〃	榎本氏等和蘭ニ留学ス
一八六五	慶応	一	〃	〃	市川氏等露国ニ留学ス
一八六六	〃	二	〃	〃	中村敬助、箕作奎吾氏等英国ニ留学ス
一八六七	〃	三	〃	〃	徳川昭武氏等仏国ニ留学ス

第二節 本邦に於ける英語の略史

慶長五年関原の大戦あり、天下徳川氏に謳歌し、江戸は政治の中心となる、此年英蘭船泉州堺に至り、通商貿易を求む、幕府命じて江戸に廻航せしめしに、船難風に会し、浦和〔正しくは浦賀〕に破る、船中の英蘭人上陸して江戸に達し、貿易を許さる、然れども帰るに船無く、江戸に淹留す、此間英人蘭人の頭人は各屋舗を賜り、時々城中に召されて外邦の事を問はれき、蘭人ヤンヨウスの居所を今八重洲河岸と称し、英人アンシンの居所を今安針町と称す、アンシンは即ち三浦安針なり、之を邦人と英人との接触の初となす、慶長十三年(一六〇八)和蘭人のみは通商貿易の許可を得て肥前平戸に屋舗を構へや、見るべき居留地を造りぬ、然るに寛永十五年(一六三八)島原乱あり、徳川政府の一切外人に対する警戒厳になるや平戸の居留地は取崩を命ぜられ、又翌十六年(一六三九)には宗門改めあり、同時に長崎平戸に居る英蘭種人皆海外に放逐せられたりとの記事あり、然れば当時英人の我邦にありしことを知るべし、十八年(一六四一)和蘭人のみは出島に居留を許さる、従て蘭語は自ら我国に入りしも、英語は我に入るの機を得ざりき、かくて文化五年(一八〇八)英船長崎を侵し辺警日に聞ゆ、幕府乃〔方〕伊豆相模沿海の地に砲台を設け「長崎訳官の才学あるものを撰び露英両国の語学を学ばしむ、五年戊辰化文〔正しくは文化〕更に訳官に命じ両国の語を兼学せしむ…(外交志稿)〔〕文化八年(一八一)江戸浅草天文台中に新に翻訳局を設け大槻玄沢、馬場左十郎、宇田川玄真等をして翻訳を司らしむ、宇田川榛斎の弟子に藤井方亨あり、蘭学医学を修む、次に三郎といふあり、幼聡慧、夙に英学に志し著書「文範」あり、蓋し是れ英学を講ずるの始なり(近世名医伝)嘉永六年(一八五三)米使節ペリ浦賀に来るに及び、英語其他の外国語に対する本邦人の注意を喚起し、安政三年(一八五六)九月十二日応接書中に英夷対応通弁の事を書し「英語修業の義も兼々申渡有之候処云云」といひて「英学励方今一段仕法取調候様にも可仕哉と

奉存候云云」と称したり、かくて万延元年には新見豊前守正興、村垣淡路守範正を使節として米国に遣し、二三又従へる者あり、此年福沢(範子圀〔=諭吉])氏の華英通語の発行あり、凡例に曰く「余学ニ英語ニ日猶浅矣」と、文久二年(一八六二)幕府は内田恒次郎、榎本釜二〔次〕郎、伊藤玄伯、林研海等を蘭国に留学せしめ、慶應元年(一八六五)市川文吉、小沢圭次郎露国に留学し、同二年には中村敬助、箕作奎吾等を英国に留学せしむ、かくて明治四五年の頃より英学を学ぶもの大に増加したりしが十四五年に至りては大に隆盛に赴き、十九年森文相の時に至り小学校に英語を加へたり

吾人は英学の紹介者として、また奨励者として福翁及中村翁を記せざるべからず、三田の慶應義塾と小石川の同人社とは実に英学をして今日の如く散布せしめたるものなればなり

第二章 本邦小学校に於ける英語科の略史

本邦小学校に於て英語を加へたるは実に明治十九年森文相の時の小学校令に始まる、蓋し当時高等小学校に於て土地の情況により之を加へしめたるなり、而して此時府県知事をして課程表を作らしめたり其一例につきて見るに一週の度数三、時数三、第一学年には綴方、読方、書取、習字、第二学年と第三学年には、読方、書取、習字、第四学年には前学年の続並に文法の初歩を授けたり、

二十三年の小学校令改正と共に英語を改めて外国語となし、高等小学校に於て土地の状況により加ふるを得しめたり、然れども当時実際に於て英語が多く課せられたるを見る。

二十四年の改正に於て外国語を随意科となすを得しめ、教則大綱に規定して曰く「高等小学校ノ教科ニ外国語ヲ加フルハ将来ノ生活上其ノ知識ヲ要スル児童ノ多キ場合ニ限ルモノトシ読方、訳解、習字、書取、会話、文法、及作文ヲ授ケ外国語ヲ以テ簡易ナル会話及通信等ヲナスコトヲ得シムベシ、外国語ヲ授クルニハ

常ニ其発音及文法ニ注意シ正シキ国語ヲ用キテ訳解セシメンコトヲ要ス」と。

三十三年小学校令の改正と共に「修業年限四年ノ高等小学校ニ於テハ英語ヲ加フルコトヲ得」しめ、又之を加へし時は随意科と為すことを得しめたり、又同時に施行規則を改正して曰く、

英語ハ簡易ナル会話ヲナシ又近易ナル文章ヲ理解スルヲ得シメ処世ニ資スルヲ以テ要旨トス

英語ハ発音ヨリ始メ進ミテ単語短句及近易ナル文章ノ読ミ方、書キ方、綴方並ニ話シ方ヲ授クベシ

英語ノ文章ハ純正ナルモノヲ選ビ、其ノ事項ハ児童ノ智識ノ程度ニ伴ヒ趣味ニ富ムモノタルベシ

英語ヲ授クルニハ常ニ実用ヲ主トシ又発音ニ注意シ正シキ国語ヲ以テ訳解セシメンコトヲ努ムベシ

四十年の改正には「土地ノ情況ニ依リ英語ヲ加フルコトヲ得」しめ又之を随意科目と為すを得しめたり、然れども本令に於ける高等小学校は従前の高等三四年なるを以て¹⁰⁾実際に於て三十三年の令より二年間を減少せるものなり。

第三章 欧米の小学校に於ける外国語科

英国—独^{ベルギー}国—米^{オランダ}国—白^{デンマーク}国—蘭^{ハンブルグ}国—丁^{ハンブルグ}国

独乙の小学校に於ては漢堡市を除き外国語を授くる所なきに反し

英国の小学校に於ては普く之を課せり、即ち独語、仏語等の近世語のみならず、ラテンの古語も課せる所あり（乙竹教授）

米^{シカゴ}国の小学校に〔於て？〕は之を一般に論じ難きも、「市俄古小学校にては総て上級生に独乙語を授け余等^いの見物せる某小学校の此科の授業は一切会話的にて甚だ卓越せるものなりき」と米^{ベルギー}国現時の教育にいへり⁹⁾

白^{ベルギー}耳義の小学校に於ては仏語、プレーミッシュ語〔フ^{オランダ}ラン語〕、独語中の一科を必須科となす。

和^{オランダ}蘭の高等小学校に於ては仏語、独語、英語を課す。

丁^{デンマーク}抹に於ては都会の小学校に於て近隣の外国語を課す。村落の小学校に於ては課せず。

第四章 本邦小学校英語科の目的

第一節 近世外国語教授の一般的目的

吾人は茲に小学校英語科の目的を論するに先ち所謂^い近世外国語学習の一般的目的を叙述せんとす、吾人の一般的目的といふは、かの言語学者、人類学者等の外国語研究の目的の如き特殊の目的を除外したるものなり、又近世外国語とは現代に於て地球上に使用せられ^(ママ)つつある国語を称しかのラテン、ギリシヤの如き死語（Dead Language）を斥くるものなり、

さて、近世外国語学習の目的如何 換言すれば近世外国語研究によりて招来す利益如何、吾人は決してオー

ソリチーに盲従せんとするものにあらざれどもまた先輩の説の大に参考すべき値あるを信ず故に左に二三の説を研究し然る後吾人の説を叙せん

Gouin 氏曰く¹¹⁾

Alongside the material railway needed to enable our bodies to communicate, it is absolutely necessary to construct a “mental railway” for the intercourse of minds. This mental railway must take the form of a linguistic method that shall enable a person, by means of the language, to enter into and assimilate the intelligence, and the spirit of a foreign nation, not as now, in a period of ten or of twenty years, and in so doing to expend the third part of a lifetime, but in the space between two equinoxes, or, for those of trained will, in the space of a single season. On the day when this new species of locomotive is definitely organised and put at the service of men of thought and will, the brotherhood of nations will cease to be a vain and empty word — a word which Governments laugh to scorn, and peace as well as liberty will perhaps have found their most solid foundation.

Jespersen 氏曰く¹²⁾

What is the *object* in the teaching of modern language? Well, why have we our native tongue? Certainly in order to get the most out of a life lived in a community of our fellow countrymen, in order to exchange thoughts, feelings and wishes with them, both by receiving something of their psychical contents and by communicating to them something of what dwells in us. Language is not an end in itself, just as little as railway trucks; it is a way of connection between souls, a means of communication. [...]

The purpose in learning foreign languages, then, must be in order to get a way of communication with places which our native tongue cannot reach, for there too may be persons with whom I, for some reason or other, desire to exchange thoughts, or at least from whom I wish to receive thoughts. [...]

But on the other hand it must not be overlooked that everything which is learned with a sensible end in view, and according to a sensible method, tends in itself more or less directly to develop valuable faculties, and that espe-

cially [the teaching of languages, in addition to] the actual results which it gives through the contents of what one reads in foreign languages, is an excellent means of training such important faculties as—

the faculty of observing (of observing correctly, of observing independently),

the faculty of classifying under different points of view that which has been observed,

the faculty of deducing general laws from the material collected by observation,

the faculty of drawing conclusions and applying them to other cases than the ones hitherto met with,

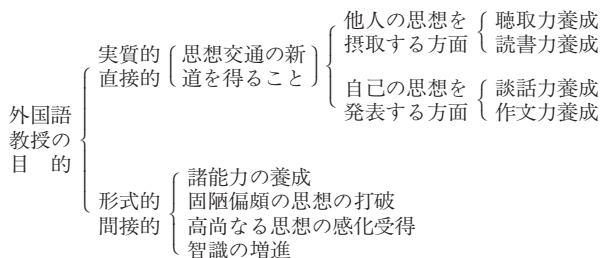
—all, of course, faculties that are nearly related — also the ability to read in general, to read intelligently, and with reflection.

ゲーテ曰く

「一外国語を曉得するは一新世界を発見する事なり」
「一外国語をも知らざる者は其自国語を充分に知らざるものなり」

抑も外国語の学習は之を形式的より見れば耳目口手等の諸感覚の練習、注意、観察、比較、概括、分析、記憶、想像、連想、情緒等の上につきての利益と、堅忍、持久、努力、快活、宏量等の諸徳の修練につきての利益とあり、又之を實質上より見れば、所謂新世界の発見、新道の開通にして、交際上、業務上又知識上に得るの利益の極めて大なるものあり、而して此等両者の利益は決して互に衝突するものにあらず

前者の利益は後者と俟ち後者の利益は前者を予想す、故に吾人は決して両者に輕重を論ぜんとするものにあらざるなり故に外国語教授の目的は之を左表の如く約せんとす



第二節 本邦に於ける外国語教授の必要

外国語学習の利益此の如し、然らば我国に於て外国語学習の必要ありや、之れ吾人の今より研究せんとする所なり 而して吾人は外国語学習の一般的利益の上よりの学習の必要なるは之を□〔1字空白〕に再する

を止め、次に他方面より之か必要を説かんとす、

抑も我国最近の文明開化の源泉は何れにあるか、曰く欧米の天地是なり、蓋し我国の今日は維新以来吾人の先輩が外国語の学習によりて欧米の文物を盛に輸入し来れるの賜なり、而して現今我か文物は未だ大に欧米の文化輸入を必要となす、何となれば我の文化は到底欧米の其に及ばざればなり、故に外国語学習は我邦に向て実に急なるものといはざるべからず、且つ夫れ今後の国際は昔日のものにあらず、今後の国際は国民と国民との交際なり、今後の国際は外務大臣に一任し能はざるものなり、更にまた経済的方面及個人交際の方面よりも外国語の学習は一日も忽にすべからざるあり、況や其国の消長は外国語研究の消長と並行するものたるに於ておや、〔以下、第三節へ続く〕

4. 小 括

日本における英語教授法研究は明治20年代に始まり、30年代には外山正一『英語教授法』(1897)を代表格として隆盛を見せる。小学校を対象としたものも岡倉由三郎「英語教授法(小学校に於ける)」(1907)など若干見られる。

しかし、小学校教員をめざす師範学校の生徒たちに対して、どのような英語教授法の授業がなされたかについては、これまでほとんど知られていなかった。せいぜい、一部の「各科教授法」の教科書に簡略に記載されている「外国語(英語)科」についての記述から類推される程度であった。

その点で、師範学校生徒用の配布プリントである『英語教授法綱要』は、小学校教員養成のために実施されていた英語教授法の授業の一端を明らかにする比類のない資料である。

それは同時に、明治末期の(広島)高等師範学校における英語教授法研究の水準を窺い知ることのできる希有な資料でもある。

『英語教授法綱要』の最大の特徴は、英語移入史、他国の外国語教育との比較、目的論、教授法、他教科との関係、教案例に至るまで、それ以前のどの英語教授法書よりも内容が体系的かつ包括的なことである。

また、英語教育を16世紀初頭の洋学伝来から歴史的に跡づけている点でも画期的である。こうした歴史的なアプローチは、これ以前はもとより、1911(明治44)年に刊行された岡倉由三郎の『英語教育』にもない。その意味で『英語教授法綱要』は、日本における英学史・英語教育史の研究および講義の最も初期の姿を示す貴重な証言者であるといえよう。

今後とも『英語教授法綱要』の翻刻を継続し、考察を深めていきたい。

注解

1) 原本では、この「第三」を含めて句点を付け「第

三、]のように記しているところがあるが、本稿では目次の他の部分との統一のために句点を省略した。

- 2) この「略史」は本文の見出しでは「歴史」となっている。
- 3) 本文の見出しでは「英語科の各分科」となっている。
- 4) 日本人初のキリスト教徒となった薩摩人弥次郎（一名アンジロー）のことであろう。
- 5) 布教のために来日したイタリア人宣教師ジョバンニ・シドッチのこと。彼を尋問して得た知識をもとに、新井白石は日本最初の世界地理書である『采覧異言』（1712）を著した。
- 6) 『英語教授法集成』（1928）では「和蘭人の天文地理書」と訂正されている。
- 7) 川本幸民が『気海観瀾広義』（15巻）を著したのは、正しくは1851年である。
- 8) 柰田は藤井三郎（質）が『英文範』を著したとしているが、今日では否定されている。なお、すでに1811年には『^{あんげりあこうがくしやせん}語厄利亜興学小筈』が完成しており、日本による英文法書としては、渋川敬直訳述・藤井質（三郎）訂補の『英文鑑』（1840～41）がある。
- 9) 『英語教授法集成』では、この引用は「米国現時の教育」の中の「カワード氏の報告」であるとしている。
- 10) 1907（明治40）年3月の小学校令改正（翌年度実施）によって、尋常小学校の就学年限がそれまでの4年間から6年間に延長されたため、新たな高等小学校は2年制（まれに3年制）となり、それ以前の4年制高等小学校の3・4学年に相当した。その結果、高等小学校は中学校と学齡的に並行することになり、袋小路的で差別的な性格が強まった。英語の程度も中学校よりも格段に低かった。
- 11) このグアンの引用は、*The Art of Teaching and Studying Languages*. by Francois Gouin, translated from the French by Howard Swan and Victor Betis. (New York: Longmans, Green & Co.; London: George Philip & Son, Ltd., n.d. [1892]) p. 2 からのものである。なお、この引用文の英語版原文との照合では香川大学の竹中龍範教授にご協力いただいた。記してお礼申し上げる。なお、『英語教授法集成』「第四章 本邦普通教育に於ける外国語の地位」の「第一節 近世外国語教授の一般的目的」では、この部分は次のように要約的に訳されている。(pp.50-51)

◎近世外国語教授上吾人の決して忘るべからざる
 仏人グアン氏はいった。「吾人の身体と身体との

交通のために「物質的鉄道」が必要である如く
 吾人の心と心との交通のためには、「心的鉄道」
 が必要である。而してこの鉄道は吾人をして外国
 の人の思想感情を充分に了解せしめるものであ
 らねばならぬ。而してこの事に行はれるとす
 れば、今日唯空言に終って居る「四外同胞」と
 いう語は実際の意味を持って来る様になるであ
 らう。而してこの「心的鉄道」なるものは「言
 語」である云々」と。

グアンの教授法は、弟子のHoward Swanが1901（明治34）年に来日し、紹介された。

Gouin dit
 Alongside the material rail way
 needed to enable our bodies to commu-
 cate, it is absolutely necessary to construct
 a mental rail way for the intercourse of
 minds. This mental railway must take
 the form of a linguistic method, ~~not~~
~~to the form of~~ ~~method~~ that shall
 enable a person, by means of the
 language, to enter into and assimilate
 the intelligence, and the spirit of a
 foreign nation, not as now, in a per-
 sonal

図3 『英語教授法綱要』のGouinからの引用部分

- 12) この引用は、Otto Jespersen's *How to Teach a Foreign Language*, George Allen & Unwin Ltd. London, 1904, pp. 4-7 からのものである。ただし、途中で割愛部分があり、[...]で示した。この英訳版からの引用部分は『英語教授法集成』（pp.51-53）では日本語訳で紹介されている。なお、柰田は広島高師の学生時代の1907（明治40）年に、同書の抄訳を「外国語の教授法を如何にすべきか」と題して『教育実験界』第20巻8、10、11号に連載している（ペンネーム「木公生」）。抄訳とはいえ、同書の本邦初訳であろう。完訳版は1913（大正2）年に前田太郎訳述で『エスペルゼン教授語学教授法新論』として刊行されている。なお、イエスペルゼン受容史の先駆的な業績としては、『広辞苑』で有名な新村出が1901（明治34）年に『イエスペルゼン氏言語進歩論』を刊行している。

参考文献

- エスペルゼン博士原著・前田太郎訳述（1913）『エスペルゼン教授語学教授法新論』東亜堂書房（大塚高信補訳版、富山房、1941）
- 江利川春雄（1991）「柰田與惣之助の英語教授法研究（序説）」神戸大学英語教育研究会『KELT』第7号

江利川春雄(1993)「英語科授業史における杗田與惣之助」伊原巧・江利川春雄・林浩士編『英語科授業学の諸相』三省堂

江利川春雄(2001)「明治期の小学校英語科教育法：杗田與惣之助『英語教授法綱要』(1909)を中心に」日本英語教育史学会第17回全国大会(於広島大学)発表ハンドアウト

江利川春雄(2006)『近代日本の英語科教育史：職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』東信堂

江利川春雄(2008)『日本人は英語をどう学んできたか：英語教育の社会文化史』研究社

岡倉由三郎(1907)「英語教授法(小学校に於ける)」『教育大辞書』同文館

棚橋源太郎(1902)『小学各科教授法』金港堂書籍

広島高等師範学校創立八十周年記念事業会(1982)『追懷：広島高等師範学校創立八十周年記念』同事業会

杗田與惣之助(1928)『英語教授法集成』私家版

森岡常蔵(1905)『各科教授法精義』同文館

文部省総務局調査課編(1938・1943)『師範教育関係法令の沿革』(正編1938、続編1943)

脇屋督(1927)『改訂増補 最新 外国語の学習と教授』青々書院(1931改訂増補版)

(謝辞)『英語教授法集成』をはじめとする杗田與惣之助関係資料の閲覧については、次女の杗田愛子氏・(故)昌弘氏ご夫妻に大変お世話になりました。篤く御礼申し上げます。